
彼の特別

あーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼の特別

【EZコード】

N4171Z

【作者名】

あーゆ

【あらすじ】

大学生になった新一たち。

ゼミ仲間の国本沙耶は新一に片想い。

彼女がいることを知ったが本人にも止められないくらいの嫉妬の渦に飲み込まれる。

蘭と新一はこのまま引き離されてしまうのか…?

彼女は片想い中

「なー、卵焼き頂戴」

「やだ」

「ほんとうとに工藤くんのお弁当ってこつも見事…」

「お母さんが作ってるの？」

ゼミのグループワークのために昼休みに研究室に集まつた私たちの
グループは
いつの間にか話題が”工藤くんのお弁当”

「あれ？でも工藤の両親は海外にいんだり？」

「まさか自分で…？」

黙々と、でも美味しい工藤くんはお弁当を食べ続ける。

みんながワイワイと”誰が作ったのか”を論議していくのを聞きながら
彼を見つめていた。

「なに考へてんのか本当にわからぬ——やつだなあ」

田中くんが工藤くんの頭を小突いた。

「探偵たるもの、分かりやすくてたまるかよ」

「でもお前より服部のが馴染みやすいだわ」

「じゃあ探偵としてオレは服部に勝つてるな」

田中くんは工藤くんに悪態をつこうが実はゼリヰ生のなかで一番の仲良しだった。

彼が事件に呼ばれてゼリヰを休んでもきちんと課題や日々の出来事を把握しているのは田中くんが連絡をしてこゆからだ。

「そんなことじゃー彼女できねえだ」

びきーーー！

”彼女”って言葉に反応してしまった。

「…よけーなお世話だ

工藤くんは顔色を変えず答える。

「新一は”彼女には”優しいタイプだもんなー」

声のすむせつへと顔を向けるピアノにもたれかかってニヤニヤしていの黒羽くんと服部くんの姿があった。

「彼女には優しいタイプ？」

私の横で美緒が興味津々という感じで聞き返した。

「そ。」こいつ、他人にほとんど興味ないくせに彼女の「ことになるとお構い無しやで。周りに見せたことない笑顔向けるしな」

「よけーなこと言つてんじやねーよ」

少し顔を赤くした工藤くんは空のお弁当箱を鞄にしまって席を立つ。

「んじゃ、グループワークはそんな感じで。オレも少しどとめてみるから。お疲れさま」

「…彼女には優しいんだって、沙耶」

「からかわないでよ～」

私、国本沙耶は東都大学法学部一年生。

工藤新一くんに田下片想い中…

「唯一の救いは、一年生のゼミ分け、基礎教養系は出席番号わけだから工藤くんと一緒にだけど…それだけだもんな…アドレスすら聞けない」

「入学してから結構経つのにまだ工藤くんと壁あるもんね。でももうすぐ夏休み…!休み中もゼミの集まりあるしチャンスだつて…!」

そうか。たしかにそうだ。休み中だって会える。
それにゼミ研究を口実に連絡をとることだつて…

よしー！頑張るぞ

午後の講義

工藤くんの後ろ姿を眺められる位置に席をとらずつと考えていた。
彼女にしか見せない笑顔・優しさはぜひ表現されるのだろうか。
優しくされる資格が欲しい。

入学式以来ずっと見つめている

サークルにも入っていない彼はあまり女の子と話す機会もなく、お
そらくゼミ研究で一緒に私も沙耶が一番彼と話す女の子だろう。

彼のプライベートは知らないが学校の中では近い位置にいると思つ。

頑張つてその距離を縮めたい…

「新一、今日なんか予定あんのか？」

「いや、特には。」

「今日母さんも青子も遅いらしいんだよ。飯、あやかりせて～

「あ。ええなー、オレもーー。」

「ふわけんなつ。白炊しろよーー。」

服部くんと黒羽くん・工藤くんの3人は入学前から友達らしい。とても仲がいい。

容姿も整ってるし3人そろつとより目立つ。

なんだかんだ言いつつ最後は工藤くんがおれで携帯で電話をして

”黒羽と服部と帰るから、突然わりいな”なんて会話をしていた。

電話の相手は誰だろう。

翌日

工藤くんと服部くんは休みだった。

黒羽くんの説明だと

”新一に来た事件の以来に面白がって平次もついてつた”ってこと
らしい。

「ゼミ研・工藤くんいないと進まないねえ…」

美緒がポロリと発言。

明後日仮提出なのに殆ど進まなかつた。

「……工藤の家、行つてみねえ？」

「お。いいねえ～」

田中くんと木下くんがいたずら顔で提案する。

「どんな生活してるか見たいしね！～いなかつたら戻つてくれればいいんだし！～」

美緒も行く気満々。

田中くんが以前「米花」「丁田」と聞いていたこともあり行ってみることにした。

「 「.....」

「表札は工藤つてなつてるよ。」

「.....でか」

大きな洋館はなんの苦労もなく見つかった。

「（）に独り暮らしへびつよつ...家政婦さんとかいたら...」

ドキドキしながらチャイムを押す。

『.....はい。』

「あ・工藤くん!...ゼ!!の田中・木下・木梨・国本です」

『はあー?なんでオメーら....』

「突然わりいな!!あけてくれー」

田中くんがそういうと、"涉々"と玄関があく。

「事件解決したなら学校来いよな。」

「さつき帰ってきたんだよ」

そう言いながら工藤くんはネクタイを緩める。事件にはスースで向かうんだ」と一つ知れたことに頬がゆるむ。

「しかし独り暮らしなのに綺麗にしてんなあ…俺ワンルームだけど荒ってるぜ」

木下くんが感心して見回す。

「…まあな。」

工藤くんが少し照れたように視線をずらす。

私は少し違和感を感じた

ガチャガチャ

「新一い。帰つてるの?」

「げつ…!」

「…「え?」」

「…『』めん、友だち来てたみたいね…」

可愛らしい女の人がリビングに遠慮がちに顔出した。

だれ?

その後ろから意外な人物。

「なんだ。田中たちじゅん。」

「く…黒羽くん」

「蘭ちゃん、新一のゼニアの仲間だよ」

黒羽くんが女の子に説明した。

そうすると彼女は納得したように頷く。

「邪魔して」めんなさい。黒羽くん、奥行こう！」

黒羽くんの背中を押してリビングを過ぎようとした彼女を工藤くんが制した。

「な・ん・で・黒羽がここにいるんだよ。」

「夕飯、3人で食べようと思つて。だめ？」

「ダメじゃねーけど…」

「新一は俺を食え死にさせる気か？ま、オマーは忙しそうだし蘭ちゃん、奢るから外で飯食おつよ」

3人のやり取りに田中くんがつっこむ。

「蘭ちゃん…って言つたっけ？黒羽の彼女なんか？」

私もそう思つたけど何か違和感…

そしてそれを聞いた工藤くんの顔色が変わる。

「違ひつよ。蘭ちゃんは新一の彼女

一之と黒羽くんが笑う。

かかかか…彼女いたの…?

「あ…毛利蘭です…!」

慌てて頭を下げる蘭ちゃんはとても可愛かった。

リビングで話し合いをしている間、黒羽くんは奥でゲーム。
蘭ちゃんは私たちにお茶を出したり、土藤くんの脱ぎ散らかしたス
ーツの上着を片付けたりと田まぐるしく動く。

先ほど感じた違和感はこれだった。

綺麗に片付いている室内に対して

スーツはクシャクシャになつてソファーに置かれているし帰つてき
て使つたであの「アヒーメーカーの周りには粉が落ちていた。

第三者が、土藤くんの後を追いついて片付けをしてくれている
ことは容易に想像できた。

「新一、あたしあ買い物に行つてくるね」

蘭ちゃんが遠慮がちに声をかける。

「あ…じゃあオレも…」

「だ・め……ゼ!!」のグループワークなんでしょう? ちゃんと新一も参加して……」

立ち上がりつつある工藤くんを制してお説教。

そんなことできるのは蘭ちゃんしかいないんだひつなあ……

「お邪魔しましたあ」

「またな・工藤!!」

「黒羽・あんま2人の邪魔すんじゃねーぞ」

バタバタと玄関で別れの挨拶をする。

その時、蘭ちゃんが帰ってきた。

「あ・もつ帰るの?」

「うん・お邪魔しました」

動揺する気持ちを隠しながら答えた。

「重そづね」

蘭ちゃんの手を見ると沢山の食材。

それを何も言わず工藤くんが奪い取った。

「……だから一緒にいくつたのに」

ボソリと呟くそれを私は聞き逃さなかった。

「工藤の彼女、美人だつたなあ」

「お似合いつて感じで」

田中くんと木下くんが話していたけれど私はそれを素直に聞き入れることができない。

「沙耶、大丈夫？」

美緒が顔を覗き込んで心配してくれる。

「……ん、平氣」

嘘をついた。

平氣じやない。

みんなと別れたあと

呟いてみた。

「…………しんいち…………」

しつくりこないその呼び名。

彼女は自然と呼んでいた。

羨ましいな。
するいな。

嫉妬……みつともないけど

それをとめることができなかつた。

2・寂しさと不安

大学に進学してから
なかなか時間が合わなくなつた。

少なからず蘭はそう思つていた。

東都大学に進学した新一・快斗・平次。

米花大学に進学した蘭と青子

米花短大に進学した和葉。

それなりにみんな連絡を取つてゐるが
今までそれぞれの幼なじみカップルは学校も登下校も一緒だつたこ
とを思い出すと

少し寂しさを感じていたことも事実だ。

「かと言つて東都大学になんていく頭ないもん…」

1人で蘭は呟く。

「百面相だー」

後ろから突然声がする。

「え?」

「よ。偶然?」

「黒羽くん…」

蘭の隣に駆け寄り一緒に歩く。

「お嬢さん、考え方」とですか?」

「そんな大したことじゃないけど…あたしも東都大学に行ければよかつたのになつて」

風になびく髪を手でとかしながら蘭は微笑む。

「新一といれなくて寂しいんだ?」

からかい口調で快斗が言つと頬を染めながら少し睨む。

「黒羽くんは寂しくないの?」

「オレは寂しいけど青子がそつどもなきつと悲しい」

おちやらかに快斗は言つがきつとみんな寂しいんだと蘭は心でやつと思つ。

でも…新一は?

そんな不安もある。

もしかしたら

大学で可愛い女子に言つて寄られるかも…

幼なじみの自分なんかすぐ飽きたやうかも…

そんな想いが渦巻く。

「あ・そだ。蘭ちゃん昨日は「ひまわり」で遊びました。ありがとうございます」

「どういたしまして。今日はお母さんごるの?」

「それが今日から友だちと温泉だと？」

「じゃあ今日もどう?一緒にお夕飯

「やったね」「

最近蘭は工藤邸で寝泊まりすることも少なくない。
夕飯も朝食も新一と一緒にが多い。

もちろん、約束していくても事件に呼ばれることがあるがそれ以外はなるべく時間を共有しようとしていた。

「新一、帰ってるの?」

いつものように合鍵で入る。その様子を「夫婦だなあ」なんて快斗がながめる。

「げ……」

「あ……」

新一の家に大学の友だちがいるのは珍しい。本当に珍しい。

「…蘭。どうした？」

食卓を3人で囲みながら新一が尋ねる。

「え…あ…」

沈黙

「蘭ちゃん、俺おかわりー」

「あ、はーい。新一は？」

「いる」

パタパタとキッチンに移動する蘭を見送つてから快斗は口を開く。

「不安なんじゃねーの？」

「は？」

箸を置いて新一を見据える。

「事件でいないことも多いなか、大学が違っちゃって…寂しいって
わざわざ言つてたぜ」

快斗がそう言つと新一も少し考え込む。

「…………オレだつて寂しこよ」

「… のわつこはな? ゼ!! 仲間の女のも家に呼んで楽しむ「じやん」

快斗はわざと蘭に聞こへるよつて叫ぶ。

「んなんじやねーよ……勝手に来たんだつて……」

顔色も変えずに否定する新一。

「はーあ。わかってるナビ。蘭ちゃんに説明してやれよ」

「わかつてゐて……」

「なにが分かつてゐて?」

笑顔でお茶碗を新一へ快斗に渡す。

「今日…おひちやんにオレが電話するから泣まつてけよ。」

「…え?」

蘭は突然のことに驚いているが嬉しそうに微笑んだ。

「じゃあ邪魔者さうと食つて帰らーっと

食事が終わると快斗は本当にすぐに帰った。

食後のコーヒーを飲みながら2人並んでTVを見る。

その時に何気なく蘭が口を開いた。

「…新一、大学楽しい？」

「へ？ 突然なんだよ。蘭は楽しくないのか？」

「ん？ 楽しいよ。青子ちゃんもいるし。授業も楽しいし。
「じゃあなんだよ。」

新一が怪訝な顔をして尋ねる。

「……今日来た女の子、よく一緒にいるの？」

蘭が視線をそらしながら問う。

その姿に新一は口元がゆるむのを隠しながら蘭をつづく。

「妬いてんだ？」

「妬いてないもん。ただ……」

「ただ？」

立ち上がりコーヒーのお代わりを淹れにいく蘭を田で追いながら新一はカップを空にする。

「…あの子たちはあたしの知らない新一を知ってるんだなって…しかも2人とも可愛いし」

少しいじけている彼女を見て「あ…可愛い」なんて思つて新一は見つめる。

「オレがオメー以外に興味ねーってまだわからんねえの?」

後ろから抱き締められて思わず少しコーヒーを溢した。

「ちょっとー!新一危ないよー!!」

付き合い始めてから抱き締められることなんて何回もあるけど

いまだにドキドキする…。

そんな心地よさを感じながら「か胸騒ぎがする。

どうか胸騒ぎが気のせいであつて欲しい。そんなことを思いながら蘭は新一に身を預けた。

3・視線…?

「別に一緒に出ることないのに」
お弁当を作りながらそんなこと言つがその顔は言葉と裏腹。嬉しそうだった。

「いいだろ。」一緒に登校“なんて久々で”

「今日は帰りに少し園子たちとお茶する約束してるので連絡するね」

「遅くなるようなら迎えに行くけど」

新一が真剣な顔して言つがそれが逆に面白かったらしく蘭は声を出して笑う。

「新一はあたしのお父さん？大丈夫よー！」

ピシッとアイロンのかかつた包みにお弁当を入れ新一に手渡す。

「こつもありがとう」ゼロマス

「いえいえ。いつもお粗末様です」

穏やかな時間が流れる。

「今夜ハンバーグがいい」

玄関の鍵を閉めながらそんなことを新一が囁つ。

「今日はお父さんが家にいるからダメよ」

いたずら顔で蘭に言われた新一は「うう」といじけた。

「だからオレは大学生になつたらこの暮らしつつ提案したのに
……」

「だつて仕方ないじゃない。お父さんが結婚もせずに同棲はダメつ
て言つんだもの」

「……まあ。そうだけど」

本気でいじけ始めた新一の右手を握り歩き始める。

「新一、簡単に引き下がつたから本気じゃないんだと思つた」

「オレはいつだって本気だよ。近々もつかい交渉しに行くから」

その真剣な声に嬉しくなりながら駅へ向かう。

『なーんか…家を出たときから視線を感じるんだよな

かと言つて危害を加えてくる様子もない。

『狙いはオレはか…それとま蘭か…』

ぶつぶつ考えながら2人で改札をくぐると明るい声がする。

「おはよーー工藤くん、蘭ちゃんーー！」

「あ、おはよう。和葉ちゃん」

「はよ。あれ？ 1人？」

「うん、平次今田はお昼からやつまだ夢んなかや」

3人で電車に乗り蘭と和葉は一駅、新一は二駅乗つて降りた。

「あつれー？ 新一早いじやん。今日2限からだろ？」

駅から学校へ向かつ途中に快斗と偶然出会つた。

「蘭が1限からだつたから一緒に出たんだよ」

そつ言い捨てながらキヨロキヨロ辺りを見渡し怪しい人物を探す。

「ん？ どひした？」

「…朝から視線を感じるんだよな…」

「つけられてんのか？」

快斗も真剣な顔つきになる。

「なんとも言えねえけど。」

そんな2人の空氣を壊した人物がいた。

「おはよー、上藤くんと黒羽くん」

「あ… 国本」
「おはよー」

さわやかに髪をなびかせながら沙耶は挨拶をした。

「上藤くん、昨日は突然お邪魔してごめんね」

上田遣いで謝罪をする沙耶。

「や… 別に」

素つ気ない返事を気に止める様子もなく口一つも笑って校舎へと消えてった。

その姿を快斗は真剣に見つめていた。

「どう思つ?」

新一は快斗に問ひ、

「なに?ズバッと聞くじゃん」

「たぶん… 彼女じゃないかとオレは思つんだよな。確信はねーけど」

「めざらしじゃん。確信もなく疑うなんて。」

「狙いはわかんねーけど…」

「まあ。これは俺の勘だけじ…蘭ひやん、気をつけてやれよ。」

4・なりたい（前書き）

じねじねと彼女が動き出します。

4・なりたい

「はーあ。」

盛大なため息をついて青子は頬杖をついた。

「どうしたの？ 青子ちゃん」

ノートを書きながら心配そうに顔をして覗きこんだ。

「和葉ちゃん」と服部くんは一緒に住んでるし、蘭ちゃんは工藤くんと仲良く過ごしているし…羨ましい」

「黒羽くんと何かあったの？」

「まあ青子が忙しくてなかなか会えないものもあるけど…ちょっとと工藤くんにヤキモチ」

ふて腐れて言う青子に蘭は笑う。

「たしかに新一があんなにお友達と時間共有してんのは黒羽くんに出来つまでなかつたかも」

その笑顔を見ながら先田の快斗との会話を青子は思い出していた。

梅雨真っ只中のカワヒでの出来事だ。

「え？」

「だからモテる男を彼氏にもつと大変だなって…」

甘い甘いココアを飲みながら快斗は盛大にため息をつく。

「快斗、ナルシストになっちゃったの？ それともモテ期？」

「ちげーよ。それに残念ながら似たような顔立ちなのに俺はまったく大学で言い寄るやつはない」

少しホッとしたのを自覚しながら仲良しの友だちのことを気にかける。

「…言い寄られてるの？」

「ただのゼミの仲間なんだけど熱い視線を送ってるな。蘭ちゃんは大学に遊びに来たりしないから存在もしらんにだらうし。」

「ズバツと工藤くん拒否しちゃえばいいのに」

それが出来れば苦労はねーんだが…なんて顔をして腕を組む快斗を見つめた。

「蘭ちゃんのことば心配だけど…久々に青子に会つても話題は工藤くん。快斗って青子より工藤くんが好きだよねー」

田の前のティーフロートを飲み干してフンシと舌っぽを向いた。

「冷たい」と呟つなよ……あの2人不器用で心配になるんだよ。どつかの誰かさんたちみたいで。」

「どうかの誰かさん?」

「ア。いいで向を合ひてお茶している2人みたいな」

そう言われては聞くしかない。

「…どんな感じなの……？」

快斗から聞いた”ゼミ仲間の熱い視線を送る女”と接触したことを見から聞かされ青子の心臓ははね上がった。

「どんな子なの?」

心配そうに聞くが心臓はバクバク。
一つ気にかかることがあったのだ。

「可愛い子。2人ともあたしとは違うタイプだったわ。
なんか…つまく言えないけど」

「2人とも暗い顔してどないしたん?」

ひょいと和葉が顔を出した。

「「和葉ちゃん」」

「お皿しょー」

お弁当をつつきながら話の続きを。

「でもその子たちゼミの集まりだつただけやろ? 上藤くんは蘭ちゃん以外は田に入らんて! -!」

「……うん」

「蘭ちゃん、なにかひつかかりがあるの?」

「…その子たちとは関係ないんだけど…朝、家を出たときから電車を降りる時まで視線を感じたんだよね」

「「視線?」」

「うん…気のせいかと思つたんだけど、新一もひょつと氣にしてたみたいだし…」

それを聞いた青子は少し考え込んだ。

机の上で携帯が震える。

「工藤くーん。なつてるよー」

携帯やらノートを出しっぱなしにしたまま机に突っ伏して寝ていた新一の横で沙耶は携帯を手に取った。

「あ…」

ふと見ると

”蘭”の文字と電話番号の表示。

ざつと田を通し新一を揺らす。

「工藤くんーー工藤くんーー」

「ん…なに?」

寝起きの表情にドキッとするのを隠しながら沙耶は新一に携帯を渡す。

「電話 なつてたよ」

履歴を確認して少し表情を和らげた新一を見ながら自分の携帯に先ほど暗記した番号を打ち込んだ。

「沙耶ーー後ろから見て誰かと思つたよ。めずらしおね、髪を下ろ

してゐるなんて」

美緒が肩を叩いた。

「あ…氣分転換…かな」

「似合ひでるけどね」

そう言つて美緒は買つてきたパンを隣に座つてかぶりつく。

「工藤……昨日は悪かつたな（突然…）」

「…ほんとだよ。今度からは連絡入れろよ。」

賑やかに田中たちが近づいてきたが新一は無愛想に答えた。

「しかし…蘭ちゃんだけ？すげえ可愛いな」

「…気安く呼ぶなよ

ますます無愛想になる新一にお構い無く田中たちは話しかけた。

「なになに…？工藤って彼女いんの？」

「しかも可愛いって…！写真とか見せようよ…」

かつて世間に騒がれた”高校生探偵”，現在はメディアの露出は抑えているが探偵として名の売れている新一に”特定の彼女”がいることに皆興味津々だった。

一部を除いて。

「…残念だったね、沙耶」

「なにが？」

「工藤くん、彼女いたなんて…」

食べていたパンを置いて美緒は新一に田を向けながら沙耶に言葉をかけた。

「沙耶、高校生のときから探偵の彼のファンだったしね。」

「…当時は新聞とかでしか顔知らなかつたけどね。大学で見ています好きになつちゃつたもん」

うつとりと沙耶も新一を見る。

「蘭ちゃん…羨ましいな」

「え……？」

思わず美緒は沙耶を見た。

「あたし、蘭ちゃんになりたい」

その目は真剣だった。

「沙耶……？」

「あたし今まで手に入れられなかつたもの、ないもん」
真剣な目に
美緒はなにも言えなかつた。

5・接觸

「黒髪でー、細くて色白でー…ああ、いつのが好みなんだな」土藤は

しみじみと田中が言ひ。

「うわあ～会つてみてえ」

周りの男子が盛り上がった。

「うわせー。言ひいろ」

新一は周りをジロリと見て席を立ち、携帯で電話をかけ始めた。

おやりく、愛しの彼女に…

あんなに優しい顔をしてかけるのか…と沙耶はじつと田中で追つた。

「あ…蘭へビうした？」

『あ…』めんなさい。突然なんだけど…』

「…え？まじ？」

微かに嬉しそうな顔をしたのを沙耶は見逃さなかつた。

やだ……自分でも今、自分が嫌なやつだってわかる…

そう沙耶は思いながらも

自分の茶色い髪をつまんで見つめた。

「くつどーーー何しどんや？飯にしようや」

「なあに二ヤケた顔してんだよ」

賑やかに快斗と平次がやつて來た。

「…………オメーら聞いたか？」

「「ああ？」」

「買い物終わつたら蘭たち3人でここに寄るつて」

「何でや」

「また急な話だな」

3人は急にソワソワし始めた。

彼女たちが大学に現れたことは今までにないのだ。

まあ もちろん

彼らの

”独占欲”で学校の 自分たちの周りの男子に彼女を見せたく
ない気持ちももちろんあつてのことだが…

「工藤くん、びっくりした?」

「うん、でも行つていいみたい」

電話をきつて蘭が微笑む。

「久々に6人でお茶できるね!! 楽しみ~」

「ゼ!! のその子見れるんかなあ。ちょい気になるなあ」

和葉は純粋にそう言つたがただ一人、青子はまた難しい顔で卵焼き
をついついていた。

それはまた、同時に快斗も沙耶を見つめて同じ行動をしていた。

「国本さんってどこの高校出身だっけ?」

「西高だけど…どうして?」

あまり沙耶に話しかけることのない快斗が声をかけたので周りはみんな驚いていた。

「西園がー…」

「どうした? 黒羽… なんや難しい顔で」

ヒソヒソと隣で平次が聞く。

「いや、ちょっとな」

「だいぶ予定時刻過ぎたけど… こりゃ?」

「いや… むりんね」

買い物を終えた女性陣はたくさんのショッピング袋を下げて東都大内をウロウロしていた。

「よく研究室にこむとか言つてたけど… 電話してみよつかな

蘭が歩きながら携帯を取り出した。

「あ… 蘭ちゃん前… ーーー」

ドンフ

毒子の声も遙く思いつきつ人にぶつかった。

「「」...「」めぐなせ」...」...「あ」

「あ...こんなに泣け」

ぶつかつた相手は沙耶だった。

「買い物帰りに寄ったんですか？」

ぶつかつた拍子にぶちまけた真新しい洋服たちを広いながら沙耶は微妙な笑みを向けた。

「蘭ちゃん大丈夫？」

「洋服、ビニールかかつてよかつたなあ」

全てを拾い終えて沙耶が手渡した。

「藤くん、学生ラウンジにいましたよ。それじゃ

立ち去る沙耶に慌てて頭を下げた。

「ありがとうございました」

「知り合いなん?」

「あ、今のがその...ゼニアの」

「蘭!...」

上から声がして3人は見上げた。

すると2階の窓から快斗・新一・平次が顔を出していった。

「工藤くん。青子たちもいるんだけどなー」

「あ・わりい」

少しげいたずらな顔をして新一は笑う。

「今そつちこくから待つてて」

快斗の声かけで男性3人は窓を閉めて支度をし始めた。

大学で6人で集まるなんてはじめてだ。
校外で待ち合わせをすることがあっても学内に入ることなんてない
のだ。

「…なんか、よう見ると荷物多いな」

和葉たちを見て平次は心底驚いた、といつ顔をした。

「ええやん。これを最後に夏のセールまでは買い物我慢するんやから」

そんなやり取りを見ながら新一は然り気無く蘭の荷物を奪い取るようを持つ。

「あ…ありがと」

「工藤くん紳士へ やつぱいひとつで差が出るんだよ、快斗と
工藤くん」

「え？ じゃあなにか？ 僕が新一に似ると。」

「勝つてると思つてたの？」

後ろのそんなやり取りはお構い無く。
新一は蘭の荷物に目をやり疑問をぶつけた。

「なんか砂ぼこりやら葉っぱが袋に入つてんのはなんでだ？」

「あ… セツキ人とぶつかって荷物ぶちまけちゃったんだ」

「なあにやつてんだよ。気を付けろよ」

袋についた砂を手で払いそんな注意をとばす。

「ぶつかった人、新一の家に来た女の人だつたよ」

蘭の純粋な笑顔に新一は真剣な顔で見つめ返す。

「長い茶色い髪の人？ 背の低めの…」

新一の言葉に”そつそつ”なんて軽い感じに返答をした。

「ふーん、そつか」

「なに？」ともなかつたよつこ

新一は左手でくしゃつと蘭頭を撫でた。

「うれしいなあ 6人でお茶なんて久々だし いわゆるトリプルデートだよねー！」

青子は注文したパフェを頬張りながら嬉しさを全身で表現した。

「またしばらく集まれそうにないもんなあ。青子ちゃんと蘭ちゃん、忙しくなるやろ?」

聞き捨てならなかつた。

”忙しくなる?”

もうすぐテストがやつてきて、その後は楽しい夏休みのはずなのに。

「やうなんだよねー… テスト前にテスト対策合宿とか言つて学校泊まり込みの一泊三日…」

蘭はカフェオレを啜りながらさうと言つ。

「まじ? 聞いてねえけど…」

「だつて今日発表されたんだもん。あたしも青子ちゃんもびっくりたよ… まさか学校に泊まり込みなんて

「全然外出らんねえの?」

「コンビニに行くくらいはできるけど基本的には外出ダメみたい…」

拗ねたように珈琲を流し込む。

「ふーん…」

「あーあ。工藤めっちゃ拗ねとる」

「本当に蘭ちゃんいないとダメだよなあ」

「うーセーよ… うーか強制なのか? それ」

「うん… だって単位に関係あるんだもん

「残念やなあ、土藤も黒羽も。黒羽はまあ実家やから平氣やひ。土藤は飯、どないするん?」

「オレだつて作れねえことねーよ。こぞとなつたら『…』

「コンビニ弁当はダメよ…!」
すかさず蘭の注意がとび
一同は笑いにつつまれた。

「なあ、とこりでさ。女性陣の学校に西高出身の子つている?」

「西高があ…」

「周りにはおらんなあ」

「もしいたら教えてくれる?」

□元に笑みを浮かべながら快斗は甘い珈琲を飲んだ。

6・動かす

みんなと別れたあとに新一に手を引かれいつも道を歩く。
工藤邸の近くに来たとき

「少し寄つてけよ」

と反則的な笑顔を彼女に向けた。

ほぼ強制的にともとれるその誘いに”もー”なんて答えながら嬉しそうに鍵が空くのを隣で蘭は待っていた。

ふと蘭がポストを見るとなにかが入っている。

「？」

分厚い封筒が投函されていた。
宛名も差出人もない。

「新一、これ…」

「んー？」

封がされていなかつたため蘭が新一に差し出したとき中身が滑りおちた。

謝罪の言葉を述べながら慌てて書き集めていた蘭の手が止まる。

「……これ……」

「すげえな

高校生探偵として新聞に載つたときの写真の「ペー」や最近の新一の日常をおさめた写真が大量に入つっていた。

「……いつ撮られたの?」

「ああ?」

「さあつて……探偵でしょ? 尾行されたり写真撮られたり気づかなかつたの?」

半ば呆れながらも新一に危険が迫つているのではないかと蘭は心配そうに新一を見る。

「とりあえず珈琲が飲みたいなあ」

わざと蘭に甘えキッチンへ促す。

珈琲を淹れている姿を確認し、一人で封筒の中の写真を一枚残らずチェック。

殆どが隠し撮りの写真で新一が中心となつたものであつたがただ一枚、他と違つた写真があつた。

おそらく朝の視線の正体はこれの送り主。

朝、新一と蘭が家から出る瞬間を撮つたものが入つていた。
蘭の顔をマジックで黒く塗りつぶしたものがある。

自分の心臓の音が早いのを自覚しつつ平静を装う。
蘭に無駄な心配をかけなくはない。

「新一……珈琲はいつたよー」

ひょいとコソリングに顔を出した蘭を思わず新一は抱き締めた。

「なに?…どうしたの?」

「…充電中。」

ぎゅっと腕に力を入れ心のなかで誓いをたてる。

蘭を守るのはオレだ…

「沙耶、なに考えてんの?」

美緒は沙耶の買い物に付き合ってながら親友の頭のなかを覗いていた。

「なについて?」

「一応聞くけど…朝、どうしてあんなに早かったの?…びし寄つてたの?」

田舎での服を探しながら美緒にこじりつと笑顔を向ける。

「ね、覚えてる、高うのときの文化祭。」

「え？ うん…」

「ミスコンであたしが1位で美緒が2位。」

「今思つて、きり順位を強調した？」

むくれて美緒が沙耶を睨んだ。

「あたし、容姿には自信があるの。 東都大学に入れるくらいの頭もあるし」

皿洗いのものを見つけたらしく鏡の前で自分にあててチェック。

「蘭さんに負けたな」と思つんだよね、工藤くん…新一…くんへの想いの強さも、「

「あのね、沙耶。たとえそうでも、工藤くんは蘭さんが好きなのが好みの問題だつてあるだろ？ 何かが力ちつと工藤くんに合つんじやない？」

一生懸命に美緒が沙耶に訴えるがとまらない。

「わかつてる。だから、あたしが彼の好みに合わせる。」

手にとったワンドースをお会計し、満足げに袋を抱き締める。

「…呆れた」

美緒はため息をついてウキウキしている沙耶を眺めた。

…

「で？」

「でつて…俺に何を求めてるんだよ -名探偵さん-

翌朝 -ラウンジで缶珈琲を飲みながら快斗と新一はヒソヒソと話し合っていた。

「国本に出身校を聞いて -なにかを調べようとしてんのははわかつてんだよ。で? 成果は?」

「あのなあー…昨日の今日で何か分かると思つか?」

「捜査は足で!! オメー変装でも何でもして早急に調べよう

新一は珈琲の残りを飲み干しあらりと周りを確認した。

「イラついてんな。なんかあつたのか?」

神妙な顔つきで快斗は尋ねた。

周りに人がいないのを確認し -昨日投函されていた封筒を快斗に差し出す。

「うわ…悪趣味だなあ~」

パラパラと『真を眺め顔をしかめた。

「なにを感じる？」

「そりやあ”いつでもあなたを見ています”かな」

腕を組み体を仰け反らして新一はうなずく。

「なんもしてこねーなら放つておくんだけどよ。蘭が心配だ」

「同感。」

「犯人は絞れてるんだが…下手に動いて刺激すんのがなあ」

そうなんだよなあと快斗はうなずく。

犯人 … 国本沙耶が熱い視線を送っていたことは快斗も平次も、もちろん新一も気づいていた。

ただ、下手に拒否をして逆上されたら…と考えると何もできず蘭の存在を気づかせるようなことはしていなかつた。

が、いつまでもそれでは

期待をさせても…と少しずつ”彼女がいます”といつことを醸し出す予定であった。

しかし

予定よりも早く蘭と彼女は接触してしまつたのだ。

「工藤…黒羽…！」

「おー平次。 そんな慌ててビーリした?」

「彼女、まじやぞ……」

3人で頭を並べて窓から下を見る。

「……髪まで染めたのね」

おちやらかで快斗は言つが田は笑つていなかつた。

7・親友の証言

蘭に似ている。

3人が受けたのはその印象だった。

もちろん違いははつきりしていて別人なのは歴然。
しかし上から見下ろしたとき

長い黒髪が揺れ、着ているワンピースは蘭が新一に”似合うかなあ
？”と見せてきた昨日買ったものと同じだった。
凛と背筋を伸ばし歩く姿は意識して似せてきたことを匂わせた。

「危険な香りがすんなあ、工藤…」

同情ともとれるその発言に新一はため息をついた。

「どんなに蘭に似せてこようが、蘭以外に惹かれねーよ…」

「んなこたあ俺らはわかってるよ。わかっていないのは彼女だろ？」

蘭以外の女に興味はない。

新一は自分でも酷いと思うが

もし、万が一、蘭に危害を加えるような人がいたらその人物に恐ろしく冷たく接することすらできる。

蘭が”あの子に優しくしないで”と言えばその通りにできる。
だが、優しい彼女はそれを望まない。

”新一は優しいよ”

それが暗示のように胸に響き、彼女の目にはいつもならばそのような男になろうと思うのだ。

それほど、新一にとって彼女は大きな存在であり、彼の世界は彼を中心回っていた。

「こんな男のビコがいいかねー。明らかに蘭ちゃんオタクの推理バカだけど」

快斗がしみじみと言しながら新一の頬をつつく。

「少なくとも黒羽よりはいい男ですから」

笑みを浮かべながら快斗の手を払う

「それも、幼なじみの姉ちゃんの気を引くための努力の結晶やもんなあ」

「…つるせーよ」

少し顔を赤らめて口元を手で隠し肘をついた。

下では新一の姿に気づいた沙耶がにこやかに手を振っていた。

「つづーかさ、西高に探りに行くのはいいよ？でもさー、手取り早く彼女の友人に話聞いた方が早くない？ほら、いつも一緒にいるわ…」

「せやかて、そんな親友のことベラベラ話すか？」

「話すわよ?」

快斗と平次が緩く会話をしていたときに美緒が横から入ってきた。

「木梨さん…」

「沙耶は昔から成績もよくて可愛くて。イイ口だけどプライド高いからね~…

真面目さが変な方向向こちやつてるのよ」

そう言つと快斗の隣から窓を覗き沙耶を田で追つ。

「あれも、十藤くん好みにならうとしているのよ。あの子、高校生のときから工藤新一のファンだったから入学式で見かけてマジになつたのよ」

「でも愛情表現間違つてねえ?」

快斗はさきほど新一から受け取つた封筒を美緒に渡した。
中身を見た美緒も顔をしかめ新一に向き直した。

「最初はね、工藤くんに彼女がいるなんて知らなかつたから応援しちやつてたのよねー。もし沙耶と工藤が付き合えばあたしも名探偵とお近づき~なんて思つて。
でも蘭さんがいるつて知つて…諦めるかと思つたら変に対抗意識もやしちやつたみたいで。

一応説得したわよ?でも聞かなくて」

深い深いため息をついて顔を手で覆う。

親友をどうしたら止められるのか、美緒も一生懸命に考えていた。

「国本さんが蘭になんかする可能性は？」

新一が口を開く。

「直接的にはないと思うけど……どうかなあ。あの情熱がどうにどうに向くかによるけど……」

4人は腕を組んで考え込む。

「あたしも気を付けとくから。なんとか沙耶を止められるよつ」

「なあ。あんた親友やろ？なんで俺らにそんな情報くれるん？別に親友やつたら”彼女いても頑張れ”言つても可笑しくないやんけ」

平次は疑問を素直に投げ掛けた。

「沙耶に間違つたことじて欲しくないだけよ。それと……」

沙耶が一いち方に向かってくるのに気づいて美緒は小声にして続けた。

「中学のときに沙耶に彼氏とられたの。だから今さらだけど少し沙耶に仕返しも入つてるかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4171z/>

彼の特別

2011年12月21日11時53分発行